

NPO パートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名 被災地 NGO 協働センター

代表者名 頼政 良太

1. 事業名 被災地の迅速な復旧のための日本版 {POSKO} 支援事業

2. 事業期間 2020年8月1日 ~2020年12月20日 (142日間)

3. 契約金額 1,000,000円

4. 担当者名 村井雅清

5. 事業目的

2020年7月豪雨災害で被災した当事者や近隣市町村で活動する個人ボランティア及びグループのような日本版「POSKO」を応援し、作業スピードをあげることで被災地の一日も早い復旧に貢献する

6. 事業の成果

熊本県内の6団体7事業(1団体のみ2事業支援)、ボランティアグループや小規模の任意団体(日本版POSKO)を中心に各々10万円を助成した。支援団体の決定にあたっては、当団体のスタッフが現地を回り、各団体の活動内容や方針、地域との連携、活動スタンス等を直接ヒアリング。被災地のニーズに沿った活動をされている団体へ支援を行った。コロナ禍により県外からの人的な支援が見込めずマンパワーが不足し、被災者自身や被災地域住民、近隣住民が支援活動を行わなければいけない中、地域に密着した団体を支援することにより、より地域ニーズに沿った細やかな活動をサポートすることができた。緊急期の物資支援や片付け、清掃活動など被災者の基本的な生活支援だけではなく、バラバラになってしまった地域住民を集めたイベントや交流会など地域住民の心に寄り添った精神的なケア、今後の地域の復興を見据えたプロジェクトにも繋がった。そもそも7団体のすべてが活動を開始するにあたって外部の財政的支援を頼りにしていたわけではなく、自己資金でできる事を行うという思いでスタートしたのだが、10万円という支援金を提供し、人件費を含め使途を過度に制限しなかったことが、活動の幅を広げ、また多数あるPOSKOが閉所していく中でも継続した活動を模索し、チーム神瀬以外は、現在も継続されている。いろいろな人材が有機的に動いた結果がもたらす成果は、10万円という金額に替えられない価値になり、POSKO支援という新しい支援方法は今後の災害後の支援方策に多大な試金石となった。

※「POSKO」とはインドネシアで災害時に立ち上がるさまざまな支援拠点や住民の詰所のこと。

特徴は被災者自身が主体的に立ち上げる点。

7. 事業種別(コンポーネント)ごとの成果

(1) コンポーネント①

本事業でご支援したのは6団体(7事業)なので、地域全体の災害後の復旧スピードをあげるのに貢献で

きたのかの否かの評価は量的には測れない。ただ、「球磨村雲泉寺災害ボランティアグループ」「チームうと」（代表が長期療養のため活動は一時休止）は、救援物資の提供をとおして、ともすれば発災直後の日々の中で萎えてしまいがちな過酷な暮らしの中で、被災者に寄り添い続けたことは、被災者に大きな勇気を与えた。また「球磨村復興協力隊」「チーム神瀬」は、自立型炊き出しや子ども支援（※詳細は“各団体の活動成果”に記載）をとおして球磨村神瀬地区の再生にむけて「みんなでもう一度神瀬に住もう！」という希望を持ってもらう効果をもたらした。特に「球磨村復興協力隊」は、二度目の支援で、球磨村神瀬地区村営住宅の壁を使い、子どもたちが描く「アートプロジェクト」を実施する（2021年3月末実施予定）。昨年12月末から一部描き始めているが神瀬地区の住民である被災者（75）が、壁に描いた球磨川を見て「ずっと球磨川と一緒に生きてきた。川は憎めない」とつぶやいたとのこと。（別添資料 2021年1月13日付夕刊 写真特集 九州豪雨半年を参照）

そして八代市坂本町を活動のフィールドにしている「チーム桃ちゃん」は、もともと坂本に住んでいる多彩なキーパーソンと町外の支援者を上手くつなぎながら、坂本の再建に尽力されている。‘桃ちゃん’こと代表の諸橋桃子さんの影響力は、町内を歩いていても地域の”じいじい・ばば”が「あっ、桃ちゃんだ！」と声をかけるほど。“坂本で会いましょう！”（通称：坂愛）という道の駅「坂本」を会場にしたイベントには、町民はじめ被災者や町の関係者が多く集い、被災からの再建を誓い合うという成果をもたらした。

「個庫茶屋メンバー」は、人吉市下薩摩瀬にある POSKO で、床下わずかの浸水に遭った代表園田さん宅のガレージを救援物資集積場にして活動を始めた。園田さんは元小学校の教員をしていた関係からか、とにかくお友達が多い。そこからボランティアがつながり、プロの建築士はじめ DIY の素人大工さんも集まり、被災家屋のリフォームにとりかかり、被災者の一人がそのうちに住むことになった。同時にそのおうちでカフェの運営も考えており、2月15日にオープンする。先述したガレージでの救援物資の配布は今も継続している。「個庫茶屋メンバー」の活動に関わっているすべての人が、災害支援ボランティアとしては初心者だが、素晴らしい活動となった。これらの成果は、今後の災害後の POSKO 支援に大きな影響を与えることになると考えられる。

こうした成果は、日本版「POSKO」が災害をバネにして、おたがいさま・支えあいというコミュニティにおける共助を生み出したと言える。この成果は今後の復興過程においても大きなよい影響を与えることが期待できる。

各団体の活動成果 ※各団体からの活動報告等は別途添付

◆「球磨村雲泉寺災害ボランティアグループ」/ 球磨村渡地区

【主な活動内容】 救援物資提供、水害家屋の応急処置活動、水害家屋の相談対応、写真洗浄活動

【主な支出内容】 活動時の移動燃料費

- ・食糧や生活必需品を約 250 世帯に提供。7月から8月にかけては、避難所やみなし仮設で不足していた食糧や泥だし用具等、9月以降は、仮設住宅への移行と冬の準備が重なり、防寒具や暖房器具、生活家電等、各時期に被災者が必要としている物資を県内外から調達し、提供することができた。
- ・熊本県人吉市、球磨村の計 20 世帯の水害被災家屋において、約 300 名のボランティアとともに、壁剥ぎ、天井剥ぎ等の応急処置を実施した。地域には、被災家屋の応急処置の知識を有する者の絶対数が限られ、また災害ボランティアセンターは、泥出しに特化して活動していたため、当団体では、泥だし以外の活動に焦点をあて実施した。
- ・熊本県人吉市、球磨村の計 35 世帯の水害被災家屋において、水害家屋の相談対応を受け付けた。構造や基礎の確認が必要な部分については、大工メンバーの現地調査を経て、復旧方法を住民とともに検討した。
- ・球磨村において、約 2,000 枚の被災写真の乾燥と洗浄を実施。

◆「チームうと」/ 宇土市

【主な活動内容】被災者への物資支援、お茶会の実施

【主な支出内容】支援物資購入費、物資輸送費

- ・8～9月にかけて、食料品、清掃道具、消毒液など支援物資を宇土市内の拠点にて配布。人吉市、球磨村、八代市、芦北町等の施設や被災者へ物資を届けた。
- ・9/20,27には八代市坂本町にてお茶会を実施。

◆「球磨村復興協力隊」/ 球磨村神瀬地区

【主な活動内容】炊き出しやサロン活動など住民のコミュニティ支援、子どもの学習支援

【主な支出内容】活動時の移動燃料代、イベント時の資材や消耗品

- ・子どもへの英会話学習支援(毎週日曜日)と夏祭り(8/22)など実施。
- ・炊き出しや食料品提供、サロン活動など住民が集まる場をサポートした。
- ・「神瀬アートプロジェクト」企画：解体予定の村営住宅6棟にアーティストによるアート作品を描くプロジェクトを企画、実施中。人が立ち寄り集まる機会が少なく、地域の活気の1つとなった。

※2 事業支援。長期的に地域で活動可能な体制があり、地域住民を繋ぐ重要な役割を果たしているため。

◆「チーム神瀬」/ 球磨村神瀬地区

【主な活動内容】福祉センターや保育園などで子どもたちの遊びや学習支援

【主な支出内容】親子キャンプの宿泊費や食事代など活動費

- ・9/26-27に親子キャンプを実施。被災した親子31名が参加。
- ・ゴーカートやプール、BBQ等、被災で離れてしまった住民たちが集まり楽しく過ごす機会を設けることができ、子どもたちにも非常に好評だった。

◆「チーム桃ちゃん」/ 八代市坂本町

【主な活動内容】被災家屋の片付け作業や地域のイベント、相談会開催

【主な支出内容】活動拠点の家賃、活動の備品

- ・建築士会と共催で弁護士や理学療法士等に無料で相談ができる「住まいと暮らしの相談会」を計4回実施。
- ・10/11「坂本で会いましょう」を開催。坂本町内在住者や避難した元町民が参加し、炊き出しや専門家による無料相談会、足湯など癒し企画を実施。
- ・災害支援団体やボランティアと連携し、泥出しや家屋の清掃作業を実施。

◆「個庫茶屋メンバー」/ 人吉市

【主な活動内容】支援物資配布、被災家屋を活用したカフェづくり

【主な支出内容】リフォームに関わる資材・光熱費、支援物資

- ・食料品や生活用品などを拠点にて配布。
- ・被災家屋の1つをボランティアと一緒にリフォームし、住居兼地域の人が集まることのできるカフェにリフォームし、運営予定。

- ・ POSKO という発災直後に生まれる共助の仕組みによって、外部からの指示で動くのではなく、自分たちで知恵を絞り、人と人をつなぎ、目標を達成しようと行動することが復興期における大事なエネルギーとなることを痛感した。
- ・ 活動初期の思いを持続することは簡単ではないが、最初の思いの強さが、いろいろな成果を生み出すということを学んだ。被災者自身が活動の中心に立ち、互いに支えあうことで、被災により心身への負荷もかかり、断たれた地域住民の関係性を繋ぎなおし、また新たなネットワークを作り、もう一度、地域で生きていきたい、自分たちの手で地域を元気にしたいという今後の地域の復興へと繋がる想いを生み出した。

9. 協力体制の構築

- ・ 一人ひとりが財産である。ネットワークのためのネットワークを築くことは、ともすればフィールドの被災者一人ひとりの寄り添うという姿勢をないがしろにする。今回はコロナ禍での複合災害となり、熊本県外からのボランティアが直接支援に行くことが叶わなかったことが、むしろ地域の助け合いを強化したかも知れない。
- ・ 地区の区長さんとも協力体制を築き、活動を行うことができた。

10. Civic Force との協働について

- ・ コロナ禍による複合災害の中で、いつものようにボランティアによる支援が圧倒的に細るなかで、貴法人によるご支援で、POSKO 支援という方策が一石を投じたと言える。
- ・ パートナーシップ連携事業だが、当方の力不足もありパートナーシップ感を感じるのが難しいので再考する必要があるのではないかな？
- ・ ボランティア初心者の団体があったにも関わらず活動が実施できたことは、貴法人による POSKO 支援が背中を押し続けたためと考えられる。

その他

- ・ 発災直後から、本事業実施団体である「被災地 NGO 協働センター」が配信し続けている「2020年7月豪雨災害」活動支援レポート（ブログ <http://ngo-kyodo.org/2020kyusyunanbu/>）を参照